

カトリック

広島教区報

No. 78

カトリック
広島司教区

発行責任者
広報担当
服部大介神父

広島市中区鞆町 4-42
広島司教館内
TEL (082)221-6017

教皇ベネディクト十六世によって、「アルスの司祭」聖ヨハネ・マリア・ピアンネ（一七八六一八五九年）の没後百五十年を記念して、二〇〇九年六月十九日から二〇一〇年六月十九日までを、特別年の「司祭年」とすることが発表されました。それにちなみ、十月二十六日～二十九日岡山県ひるぎん蒜山にて行われた司祭研修会では、「過去を振り返り、未来に責任を持つ司祭」というテーマが取り上げられました。

蒜山司祭研修会

「過去を振り返り、 未来に責任を持つ司祭」

司祭年にあたり

昨年の蒜山研修会は、初めて司祭以外の各地区の代表信徒の方々とも一緒にを行い、それなりにいい評価を得ていましたが、今回発表された「司祭年」の司祭宛のメッセージの中で、司祭によって、司祭とともに、司祭のために祈る非常に特別な年であると述べられていることをふまえて、今年は司祭だけが集い、司祭団と司祭一人ひとりの霊性を新たにしよう準備されました。



野間、深堀、長谷川、豊田の各神父からそれぞれの体験、活動などを通して証しをしていただき、後輩たち（二面へ続く）

「司祭年」のテーマは「キリストの忠実、司祭の忠実」です。

このシンボルマークは「イエスのみ心」を表します。これは、毎年、イエスのみ心の祭日に、「世界司祭の聖化のための祈願日」が行われることに基づきまです。そこから、司祭職が招かれている特別な聖性という、司祭年のテーマが示されます。輝くみ心は、「司祭職とはイエスのみ心の愛です」という、アルスの主任司祭ピアンネのことばを表します。

イエスがまどっているストラは、イエスが唯一・永遠の大祭司であること、すべての司祭は歴史のあらゆる時代において途切れることなくこの唯一の祭司職を受け継ぐ者であることを表します。イエスの広げる手は、

司祭のみが行う祈りの姿勢と黙想を表します。キリストの両手と脇腹の傷跡は、唯一のあがないのいけにえと、司祭職の特徴である聖化と完全な自己奉獻を表します。人々を迎え入れる姿は、「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」といつているかのようです。これはすべての司祭を招く慰めのことばです。それは、司祭が、乾いた石だらけの地で、日々、愛のわざを行うことで疲れ果てても、隣人や遠く離れた人に同じ態度で接することができるようにするためにです。

（カトリック中央協議会ホームページより）



「司祭年」のシンボルマーク

(一面の続き)

への「遺言」のようなメッセージもいただきました。

二日目の夜から教区で働く司祭の研修会となりました。まずは、パワーポイントを使い具体的に目に見える形で各小教区の写真、そしてそこで働く司祭の顔の

教区の動き

【平和の使徒推進本部会議と各地区宣教司牧評議会開催】

去る十月三十一日、平和の使徒推進本部会議が広島カトリック会館で開催された。本会議は十四名(司祭、修道者、信徒)で構成され、発足以来二十五回の定例会議を重ねている。また六月と十二月の年二回開催される広島司教区宣教司牧評議会(以下、教区宣司評)の執行部(教区宣司評の議題立案や準備のための補助機関)を平和の使徒推進本部が担っており、会議では二〇〇九年度第二回教区宣司評への議題立案が中心となって話し合われた。議題の核としては、「信

写真を示し、現在の様子を語っていただき、なかなか知ることのできない、他の地区の教会や司祭の様子を実際に知ることができました。

次の日には、それぞれが、司祭叙階や銀祝などのときに作ったカードを持参して

者の『司祭年』における意識の改革」「司祭と信徒のきょうどう」「教区が抱える共通課題に対する危機感の共有」がポイントとして挙げられた。

また九月、十月に各地区で開催された地区宣教司牧評議会(以下、地区宣司評)の報告と教区に対する要望事項等の提案があった。地区宣司評は、九月六日に山口・島根地区、十月十八日に広島地区と岡山・鳥取地区でそれぞれ開催された。それぞれの地区宣司評では、地区独自の議題のほか、①司祭年の展開にお



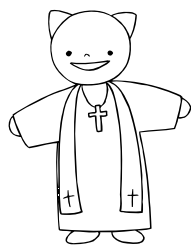
平和の使徒推進本部

見せ合いながら、それぞれの新司祭の頃を語り、さらにそれぞれが果たしてきた「司祭職」について聞くことになりました。自分の司祭職に対する思いが選んだ聖書の言葉に込められていること、そしてそれを現在も生きているだろうかとい

ける意見と提案事項、②来年のテーマおよびサブテーマ案、③二〇〇六年司教宣言後の教区、平和の使徒推進本部、各推進チームの評価と今後に向けた要望、④二〇一〇年十一月二十三日開催予定の三地区合同地区宣教司牧評議会(仮称)への要望についての話し合いもあった。今回の地区宣司評で出された意見等は、十二月の教区宣司評に向けた議題立案の準備のため、平和の使徒推進本部で集約中である。

うことを参加した全員の司祭一人一人に自分の言葉で語っていただいたことは、とても印象に残ることでした。

祭として、また新たな気づきを頂き、これからの未来に対する責任をも新たにすることができたように思います。(服部大介神父)



【平和の使徒推進本部としての具体的な活動】
今秋、平和の使徒推進本部の具体的な活動として、十月四日(日)に伯雲ブロックの行事「研修会」に講師として本部員の祇山(呉教会信徒)とシスター山本が招かれ、宣教司牧活動の基本方針「平和の使徒となるう」「平和・きょうどう・養成の三つの柱」について、広島教区の現状の取り組みを説明する機会を頂いた。松江教会で開催された伯雲ブロック研修会は、これまでの広島教区の歩みや、三つの柱が目指すもの、広島教区の現状などについて、プロジェクトを用いてできるだけ参加者が理解しやすいように工夫されて説明された。参加者も熱心に質問や感想を述べる場面もあった。挙手し精一杯に発言した一人の少女から、とても素直な感想を聞いたこ

とは、参加者にとり、この日の大きな糧の一つであったと思う。本研修会は、最後にシスター山本のギターに合わせて歌い、沈黙の祈りをささげた後、司祭の派遣の祝福で幕を閉じた。伯雲ブロックでこうした活動を展開できたことは、参加者同士の互いの分かち合いを通じ「きょうどう」の観点から山陰と山陽の地理的現状および意識の違いを知る上で大きな意味があるものであった。平和の使徒推進本部として、小教区、ブロック、諸団体からの出前要請には積極的に対応していきたいと考えています。質問や要望などは、平和の使徒推進本部にお問い合わせください。

NWMの準備に携わって

九月二十、二十一日に「第十七回ネットワークミーティング in 広島」が岡山県の閑谷学校で開催されました。昨年十一月に実行委員会を立ち上げてから約

ネットワークミーティング in 広島
Net Work Meeting
テーマは 『晴れルヤ』



NWMに参加して

私は今回初めてNWMに参加しました。初めは知り合いも少なく、一泊二日やっつけていけるか不安でした。ですが、国の特別史跡、閑谷学校で講堂学習、現代社会の問題について班で分

十ヶ月間。毎月一回準備のために集まり、スタッフの全体会議をしてきました。各々の意見が飛び交い、時には激しさもありました。そして皆の意見を取り入れながら、今回のテーマ「晴れルヤ」ここを晴れやか



NWMの醍醐味は、全国

盛りだくさんの内容をこなしていくうちに、皆と段々打ち解けてきて、この場所がとても居心地良くなりました。むしろ、初めて顔を合わせたからこそ色々話せたのだと思います。

に」と二日間のプログラムが決定しました。講堂学習では論語を学び、テント建て、竹細工、夕の祈り、分かち合い、ミサ：という、一泊二日では足りないくらい盛りだくさんの内容。

参加者は全国の青年、司教様や神父様、シスターなど、計百二十五名。当日は良い天気恵まれ、無事テントで寝ることもでき、感謝の二日間でした。

(大谷 紗由里)

から青年が集まる事だと思えます。各地の情報交換や、交流がこんなに大規模にできる所は少ないと思います。参加者の一人に「全国でこんなに教会行事頑張ってるんだね！知らなかった。私も頑張ろう！」と言った子がいました。こんな風に、一人でも多くの人に感じてもらいたいと思えました。また、せっかくできた同じ信仰の輪をこれからも繋いでいき、さらに新しく広がっていくことで、NWMの意義がもっと深くなるんじゃないかと思いました。

(飯田 知香)

一粒会 召命巡礼2009

一粒会主催の広島地区・召命巡礼が九月二十一日(敬老の日)に行われた。午前七時に広島市内の翠町教会から始まり、幟町教会、観音町教会、三篠教会、祇園教会の順に徒歩で巡り、「若者のために」「教区の人のために」「修道女のために」「教区司祭のために」「修道者のために」という各教会に用意された意向に沿って、召命の祈り、ロザリオの祈りを参加者が捧げた。また、観音町教会では援助マリア修道会の日浦修道女の講話、三篠教会では教区司祭の後藤神父の講話、祇園教会ではイエズス会の松井神父とポニー神学生の講話と召命祈願ミサも行われた。参加者は翠町で十三人、幟町三十八人、観音町五十九人、三篠六十四人、祇園九十三人の延べ二百六十七人であった。お茶のサービスなど巡礼を支援する人たちも多くあった。

一粒会は、神学生の養成

支援や外国人司祭や神学生の日本語学習支援、終身助祭の養成支援、海外小神学校への援助などを行う広島教区の司祭養成後援会だ。近年、司祭・修道者の召出しが少なく、教区の宣教師のあり方が問われている。「あなた達は召されたお召しに適うように生き、すべての謙遜と柔和と寛容をもって愛によって忍び合い、平和の結びによって霊の一致を守るように努めよ、体は一つ、霊は一つである。」(エフェソ四・一〜四)とあります。この巡礼を召命のための「信心行」として捉え、信徒の召命について考え、行動する「招き」となることが望まれる。

(幟町教会 青葉 憲明)



イエズス会 ポニー神学生

平和行事

和解をもたらす「新しい人」に

今年も八月五・六・九日に、広島教区平和行事が聖公会との合同プログラム（五日の原爆供養塔前の祈り・平和行進・平和祈願ミサ）も含めて、世界平和記念聖堂を中心に行われた。五日の平和祈願ミサには、全国各地から千人近い参加者が集い、バチカンから京都での「世界平和の祈りの集い」参加のために来日された教皇庁諸宗教対話評議会議長トールン



トールン枢機卿と大司教
ボッターリ・デ・カステッ

枢機卿と次長のビスヌ神父、また駐日教皇大使ボッターリ・デ・カステッ大司教と共に主の食卓を囲んだ。また教区内の岡山・鳥取地区、山口・島根地区からもグループでの参加があり、参加者は平和への決意を新たにしました。以下は、いくつかのプログラムからの報告。

◆シンポジウム
◆今年、「広島を考えると核戦争を拒否することです」というテーマで、平和行事参加のために米国から来られたクッシング神父、ヘッドリー神父、および松浦補佐司教、肥塚神父を迎えてシンポジウムが行われた。

クス・クリステイ）は、四年前アメリカから原爆投下への謝罪の手紙を持って巡礼団と共に来広。「真実を認める行為を日本人と一緒にしたかった」と語る。「平和を作るために何が妥当な手段なのか？たとえ戦争を止めるためであっても、民間人にあれほどの爆弾を落とすことは正当化され得な

い。私たちの考え方が平和作りにつながるものとなるような転換、回心が必要。お互いの話をよく聞いて理解する対話の心、預言的・司牧的意識を」と話した。

◆ヘッドリー神父（米、サンディエゴ大平和学）は、国境を越えてどのように平和を求めることができるのか？という問いに対して、①自分で国境を越えて人に出会う②日本に来た人に、今なお続く、過去の軍事的国家主義がもたらす影響について伝える。原爆のことを伝えるだけに終わってはならない。今生きて苦しんでいる現実を見てもらう③権力、責任を持っている人に真実を話し、メッセージ



シンポジウム

を送り続けるといったポイントを挙げて答えた。

◆松浦補佐司教（正平協）は、「この十数年アメリカからのプレッシャーで憲法が危うくなったり、基地の問題が進展してきたりしたので、私たちは米軍を批判してきた。しかし、米国には平和を作っていこうとする団体がある。その人々との交流を重ねてきた一つの契りとして今日のシンポジウムが開かれていることを大変うれしく思う」と述べた上で、「今、九条を支えているものが一つ一つ崩されている。例えば武器輸出を禁止する原則は日本の経済に大きな影響を与えているので、それを緩和しようとか、宇宙を軍事目的で使しようとか、非核三原則のうちの「持ち込ませない」原則を緩和しようというような動きなど。九条を守り、どの国にかかわらず平和を願う人と手を携えてすべての人の平和を願っていきたい」と話した。

◆肥塚神父（広島）は、「オバマ大統領の演説は核兵器廃絶への長い道のりへの一

歩。今は核兵器廃絶に向えるかどうかの重要な時であり、広島・長崎に使命がある」という。「一九四五年八月六日、人類史において新しい一日が始まった。人類の自滅の可能性がはつきりと可視化された。その証人である原爆ドームは一九九六年に世界遺産とされたが、それは核兵器廃絶と恒久平和の歴史的証人のため。平和市長会議によって発表された、ヒロシマ・ナガサキ議定書は二〇二〇年までに核兵器をなくす道のりを記している。過ちは繰り返しませんから、という私たち一人一人の、被爆者の方々への誓いを改めて思い起こしたい」と語った。

●被爆者証言

市内に住む岡本チエ子さん（八五）の被爆証言は、「歳と共に物忘れが多くなってきたが、あの日のことは忘れません。でも、本当は全部忘れてしまいたいのです」の言葉に始まった。

体験のほんの一部、建物疎開に出かけた姑さんを捜



岡本チエ子さんを囲んで

しに向った中心部の様子が語られた。そこで目にした惨状は聞いている者の耳を塞ぎたくなる様な有様に加え、当時若者だけでなく、五十歳を過ぎた父親までも召集され、二十二歳の嫁が人捜しをせざるをえなかった事実でした。兵隊のトラックに乗り、焼け焦げた死体の浮かぶ川の上の線路を渡る。現場に転がる多くの死体、連日探しに行きながら姑さんを見付けだせなかった岡本さんの無念さが、伝わってきた。

ほしいと結ばれた。他教区からの若者達の参加も多く、たんたんとして手元のメモを読み上げ、途中で挟まれる「怖いですよ」の言葉に岡本さんの当時の辛さが伝わってきたとの感想が聞かれた。

●折鶴を通して平和を

今年の企画画として準備したのが、「折鶴を通して平和を考えよう」。正方形ではない紙からでも、もつと言えばどんな形の紙からでも、鶴を折ることができるので、それをみんなで作ってみよう。そしてそこから平和を考えてみよう、という趣旨のプログラムに、約三十人の方が参加された。

最初に「おりづるの旅、さだこの祈りをのせて」という佐々木貞子さんについての絵本と一緒に読んでから、先に正方形の鶴の復習をして、ひし形鶴に挑戦。大人は子どもにかえり、子どもは大人顔負けの力を発揮し、翼の長い鶴、首の長い鶴、あるいは丸っこい鶴等いろいろな表情の鶴が

次々に誕生。覚えてたの折り方を、後から来られた方に教えたり、丸形や三角に挑戦したりと、参加者は皆熱心に取り組まれた。いろいろな形の紙から鶴を折ることの意味と一緒に考えるとどこまで行きつかなかったが、見慣れぬ形の鶴が、あの夏の暑さと共に、日々の生活の中に平和への熱い思いを刻みつけてくれていることを願っている。

●平和行事供養塔前の祈り

今年も又、世界平和を願う多くの人々が原爆供養塔前に集い祈りを捧げました。全世界に核廃絶を訴える今日、若い人達の参加が一段と多くなり、私たち共同体の祈りが愛と平和を作り出す為の具体的な行動につながって行く事を実感できました。



宗教者九条の和
第五回全国集会
中四国で初

広島宗教者九条の和と岡山宗教者九条の会の共催により宗教者九条の和全国集会在世界平和記念聖堂で開催された。「軍都」「被爆都市」「平和都市」の地広島。この意味を深く噛みしめた。アジア侵略の前線基地であった過去の罪科を振り返り人類初の被爆の惨劇を直視し、全受難者の怨恨に深く想いを馳せ、将来のいのちのため平和を切願し祈った。平和巡礼は、「過ちを繰り返させない」思いで聖堂から広島城の旧陸軍大本営跡へとたどった。集会で気づかされた、いま宗教者に特に求められている点を紹介したい。憎しみに対する憎しみの暴力連鎖から救われるのは、非暴力による対話と和解という極めて宗教的な価値観。憲法九条にはその精神が生かされている。現在は、「戦後」の時代ではなく、第三次大戦の「戦前」。人類には、環境問題や富の著

しい不平等で自爆テロが日常という怒りと憎悪とが充満。テロリストが核を手にするのは時間の問題。核拡散防止を具体的に進めない核戦争は現実となる。平和的に解決できるとすればおそらく宗教者の力によるだろう。来年五月、五年に一度の核拡散防止条約(NPT)再検討会議が持たれるが、この会議で人類の命運は決められる。宗教者である方々は、創造主がいるならその方はいま何を求めているかを真剣に考えてほしい。政治戦略で動く世界で、核廃絶・平和のリーダーシップを取れるのは被爆国日本、そして宗教者なのだから。

(岡山教会 鈴木)



左から、宗藤牧師、リーパーさん、岡本さん、後藤神父

地区便り

山口・島根地区

《地区典礼研修》

九月五日と六日に山口天使幼稚園ホールにて、ミサについての地区典礼研修会が行われた。五日は、主に教会学校に関わっているリーダーや高校生対象、六日は、聖体奉仕者や集会所式者、典礼担当者、典礼に関心のある信者対象に、両日合わせて約二百名参加した。

初めてのことで、夏の暑さの中、講師もスタッフも参加者も手探りというところもあつたが、来年以降も継続させ、内容を深める。養成小委員会は現在研修内



容をQ&Aの形にまとめている。研修の模様をビデオやDVDに記録しているのので、小教区に貸し出します。

《祈りの体験研修》

九月十二日と十月二十四日に祈りの体験研修会が行われた。前期六回コースもあと二回。十月十四日の信者養成小委員会で、後期(二〇一〇年度)六回コース日程予定が担当者から報告された。十二月末には、他の養成計画も含め、地区内にお知らせする予定。

《信者養成研修会》

十一月十四日と十五日まで、宗像の黙想の家で、第三回目の研修が行われた。テーマは「キリスト者の生」。(百瀬神父)

《養成出前》

「セブンスステップの祈り」をとおして、みことばを生活の中でもっと身近に感じてみませんか。希望小教区は、地区養成小委員会にご連絡ください。

《地区大会》

十一月二十三日、山口県教育会館で「きょうどう」をテーマに地区大会が開催される。

《日韓合同キャンプ》

来夏の日韓合同キャンプ(日本側引き受け)に向け、十月に釜山教区南川聖堂の担当者を迎え、キャンプ候補地の見学や内容についての打ち合わせを行った。

前高松教区司教

深堀 敏 司教 帰天



九月二十四日、イエズスのみ心病院ホスピス(熊本県)にて前高松教区長ヨセフ深堀(敏(さとし) 司教が腎臓癌の

ため帰天した。享年八十四歳。

葬儀は、高松教区桜町司教座聖堂に於いて、二十六日通夜式に続き二十七日から教皇大使、各教区司教をはじめ司祭、信徒ら五五〇人余りが参列し、荘厳な葬儀ミサが執り行われた。

【略歴】一九二四年長崎市に生まれる。五一年司祭叙階。七七年司教叙階、高松教区司教に任命される。

海峡からの風 16

下関労働教育センターだより

●「国民」ってなんでしょか? 日本国籍を持つている人が国民だと普通は思いますが、間違ってもいけません。しかし、場合によっては日本国籍を持っていない人も「国民」と考える必要があります。●政権交代によって、いろいろな変化が起ころうとしています。

「夫婦別姓」の選択に道が開けそうなのも一つです。し、「外国人参政権」も実現されようとしています。今から国会で論じられようとしているこの法案は、永住資格のある外国人に地方参政権を認めましょう、ということなんです。●最高裁は、九五年に次のように判決を出しています。「我が国に在留する外国人のうちでも永住者等であつてその居住する区域の地方公共団体と特段に密接な関連を持つに至つたと認められるものについて、法律をもって、選挙権を付与する措置を講ずることは、憲法上禁止され

ているものではない。」●地方行政という地域住民へのサービス内容について、永く定住している外国人が注文を言うことは違憲ではないということ。●これまで「選挙権」は国民固有の権利と考えられてきましたが、人権の発展によって、国籍保有者≠国民ではなく、国籍保有者+定住者≠国民というふうに「国民」の概念が変わろうとしています。現実には統治される地域住民である外国人が政策決定に参加するということは、おかしいことではないと、国籍の垣根を取り払い、ようやく立法される直前までこぎ着けたわけなんです。●人間の歴史は、人権を獲得するための多くの時間と差別との闘いであつたと言つてもいいでしょう。その歴史の中で、ユダヤ社会が異邦人を排除していた時代に、積極的に異邦人と交わつたイエズス。聖書の言葉は、人権とは何かも教えていると思えます。

(細江教会・廣崎リュウ)

J-CARM 広島便り 姉妹教区インフアンタ訪問

岡山教会 荻 喜代治 神父



今年も八月十九日から二十五日まで、フィリピン姉妹教区とマニラを若者たちと訪問して来ました。今年で第六回目となる旅ですが、過去最高の十八名の参加となりました。内訳は、中学生二名、高校生二名、大学生四名、大人四名、神父五名と通訳のシスター(マニラ在住)一名、出身地も山口、広島、岡山と広範囲からでした。

昼間は、全員での行動、夜は一、二名ずつのホームステイでした。訪問の内容は、だいたい例年同様でした。つまり、ナカル・カルメル高校歓迎会、カルメル修道院訪問ミサ交歓会、台風後の復興住宅ジョンポールビレッジの訪問、ジェネラルナカル教会、リアル教会、ACT修道院、女性自立の家の訪問、カタブリガンビーチでのスイミング等で、例年と異なったことは、教区のソーシャルアクシオンセンターの船を借りて、美しいビーチへの日帰り船旅、スイミング、ホストファミリーとのゆっくりとした一日を過ごしたこと、ナカル・カルメル高校でのキャンプファイヤー等がありました。また、隣のリアル教会(オツシー神父)を訪問し、神父四名は、リアルにも一泊ホームステイをし、姉妹教区の広がりを感じました。例年よりたくさんの方の参加があり、「積極的な、日本側からの元気

な出しもの」もあり、それと同時に、今後への重要な課題も見えました。つまり、「第二次世界大戦中の日本軍がインフアンタで犯した行為について」また、「今のインフアンタに於いて、行い続けられている先進国による無計画な森林伐採等による自然破壊、それに伴う風水災害」について訪問前に調べ、学ぶことの重要性が参加者自身から出されました。

今年もラバイアン、ティローナ両司教様とともに昼食をとり、また、御ミサを捧げることができました。

今年もチャリティーコンサートを中心とした収益にターを日本に呼ぶ計画が立てられています。十一月十一日から十七日の一週間、岡山、広島、呉、尾道の教会、ミッシェンスクールを訪問し、秋の日本の町並みを案内する予定です。

広島教区の施設 ⑤ 青少年情報センター

「カトリック広島司教区青少年情報センター」は鞆町教会のカトリック会館一階にあります。職員二名で毎週金・土・日曜日の十七時から二十一時までセンターを開いています。十一月からは時間を変更し、十六時から二十時までの開館となります。

ホームページ <http://hiroshima.catholic.jp/~hsjc/>

センターの主な仕事は、岡山・鳥取地区、広島地区、山口・島根地区の三地区の青年たちへの広島教区内や、全国の各教区の青年対象の行事のお知らせ、及び行事の企画、支援です。また青少年(高校生、中学生、小学生)にも各々対象の行事を紹介し、参加を呼びかけています。時には職員自身も行事に参加し、参加者と交流を深めています。

また、情報はセンターのホームページにもアップしてあります。是非ご覧ください。カトリックの青少年として何か是非やりたいということがあればお知らせください。これからも皆さんと一緒に考えていきたいと思えます。

(職員 大谷・岸井)



青少年の活動

広島教区練成会

神学生 猪口大記

毎年恒例の教区練成会が、八月十日から十二日の日程で、倉敷教会を中心として開催されました。

テーマは、既に終わってはいましたが、パウロ年と関連して『パウロについて』とし、パウロの宣教旅行や



「幟町からこんにちへ！」

ミラノ外国宣教会

幟町教会協力司祭及び司教秘書

アルベルト・ベツラ 神父

イタリアのジェノヴァで三年間、インドのチェンナイで一年間を過ごし、二〇〇七年、四年ぶりに日本、広島教区に戻ることにになりました。そして幟町教会の協力司祭及び司教秘書として任命されました。

た。幟町教会の皆さんに「初めまして」よりも「ただいま」「お久しぶり」という挨拶をするのがふさわしいのではないかと思います。

しかし司教様の秘書として、司教様と一緒に広島教区の色々な教会を訪問する度に、「神父様、お名前は何ですか？」とよく聞かれます。まだ私の事を知らない方もいらっしゃるのです、簡単に自己



生涯について皆で学びました。例年よりも勉強の時間が長く、参加者の皆さんには、パウロの様に大変な思いをさせてしまいました。しかし、いろいろな体験を通じて、練成会が何か宣教について考えるきっかけになる事を願っています。

近年、リーダー不足の状況がありました。分改善されてきました。今年、高校生サブリーダーの中から、学生や社会人のリーダーが出てきてくれる事を願っています。

また、倉敷・水島・玉島の教会の皆さんには、食事準備等で大変お世話になりました。多くの食事やバーベキュー、流しそうめん等、皆さんの協力なくしては実現不可能でした。毎年本当

に多くの方々のご協力をお願いしています。心より感謝しております。

教区練成会では、そのあり方や内容に関して、今後考えていかなければならない課題も正直に言って多数あります。子供たちの召命を考える場として、よりよいものとなるように、企画・準備をしていきますので、どうか今後もご協力とご参加をお願いします。

三末司教杯 ソフトボール大会

十一月三日、福山・芦田川河川敷で毎年恒例の「三末司教杯ソフトボール大会」が開催されました。今回の参加団体は、岡山・玉野・福山・幟A・呉・広島地区青年・高松の八チーム、総勢百三十名。天候にも恵まれ、白熱戦が繰り広げられ、呉教会が全勝で優勝しました。



優勝した呉教会チーム



司祭年。「召命の祈り」と「きょうどう（司祭とともに）」の二つを大切にしたいと思う。(よ)